



12 年に一度の霊場巡り—その 8—

前回の、都筑橋樹西蔵地藏菩薩霊場の続きです。

10 番札所 興禅寺 (天台宗)

御詠歌 道しばを ふみわけきつる 愛宕山
 またも新たに おがむ御仏

高田町の円瀧山光明院興禅寺は、仁寿3年(853年)慈覚大師円仁の開山と伝える古刹です。現在の興禅寺は南側に参道がありますが、かつては東側斜面に山門、参道があり、芝草に覆われた境内を抜けて、斜面を登り切った辺りに地藏堂と愛宕社がありました。江戸時代の『新編武蔵風土記稿』によると、地藏堂は文化11年(1814年)に一度焼失したと記されています。その後再建されましたが、高田小学校前の道路を整備した時に取り壊されました。延命地藏は、現在本堂に祀られています。

11 番札所 真福寺 (曹洞宗)

御詠歌 苦覚山 子安地藏と あほぐべし
 あまねく慈悲の 尽ぬなりけり

下田町の下田山真福寺は、17世紀中頃に欄室関牛が開山しました。山号は、古くは駒橋山と号していました。下田地蔵尊の名でも知られています。御開帳の子育延命地藏は、御詠歌にあるように、かつては「子安地藏」とか「子安延命地藏」と呼ばれていました。子安地藏は、4月から7月まで江戸やその周辺を一夜ずつ宿を取りながら廻ったことから「一夜地藏」とも呼ばれていました。自宅に一夜預かって念仏をすると子宝に恵まれるといわれ、男の子が欲しい時は白色、女の子の時は赤色ののぼりを寺から借りて帰り、子どもが生まれると2本にして返したそうです。

12 番札所 保福寺 (曹洞宗)

御詠歌 六道の 辻のまよひも 導きて
 我等を助け 救ひたまへや

日吉四丁目の谷上山保福寺は、小田原北条氏の家臣中田加賀守が開基となり16世紀後半に小机の雲松院の末寺として開山しました。

山門を入ると、右手に昭和59年(1984年)建立の地藏堂があります。堂内の子育延命地藏は、延宝5年(1677年)に造立された身の丈約5尺(約1.5m)の石像です。自分の体の悪いところと同じ部分を撫でると病が治るとの評判から、別名「おさすり地藏」とも呼ばれています。

余談ですが、“廻り地藏”の話をしておきましょう。一体の地藏を厨子と呼ばれる木の箱に入れて、信者の家から家へと順に持ち廻る民俗行事を、“廻り地藏”といいます。

真福寺には、厨子が2つ現存します。地藏は3体が安置されています。前述した一夜地藏は、巡行地藏ともいわれ、本堂の左脇陣に安置されています。常にお寺にいる秘仏の地藏は、留守番地藏と呼ばれて、本尊如意輪観世音菩薩の左脇に安置されています。もう1体、小さい地藏が巡行地藏の右脇に安置されています。かなり傷みがありますから、かつてはこの地藏も巡行地藏だったかも知れません。

寛延3年(1750年)頃に始まった真福寺の廻り地藏は、昭和42年(1967年)まで続いていました。

現在、新羽町の西方寺に安置されている百万遍念仏の地藏は、平成8年(1996年)まで中之久保地区で廻り地藏の本尊として使われていたもので、背負い紐の付いた厨子に収められています。

廻り地藏は全国各地で行われていましたが、その多くは先の大戦前後に中断しました。しかし、横浜には現在も続く廻り地藏があります。

平成25年(2013年)、鶴見川流域の廻り地藏(港北区、緑区、都筑区)と、下飯田の廻り地藏(泉区)が横浜市の無形民俗文化財に指定されました。

鶴見川流域では、港北区、緑区、都筑区の3カ所で廻り地藏が続けられています。

港北区の保存団体は、新羽町三谷戸廻り地藏講です。三谷戸とは、新羽駅の西側に位置する中井根、向谷、久保谷の3つの谷戸です。

地藏を預かった家では、毎朝お茶、ご飯、線香を供えます。預かる期間は定まっておらず、短ければ1週間、長い時は3年にも及ぶそうです。次の家に運ぶ時はお賽銭を添えて、家の主人が厨子を背負って歩いて運びます。三谷戸の廻り地藏は、特定の寺に帰ることはありません。

新羽町付近は、1990年代に横浜市営地下鉄ブルーラインと宮内新横浜線道路が開通して、急速に市街地化が進みましたが、港北区域の中では旧家の蔵や、地域の伝統行事などが比較的よく残されている地区です(第211回参照)。

記: 平井 誠二(公益財団法人大倉精神文化研究所研究部長)